

特異な価値観受け入れを

小原克博・同志社大教授（宗教倫理学）



オウムが急激に信者を増やしたのは、それなりに「魅力」があった。一つは、「ハルマゲドン」という終末思想を持ち出して、漠然とした不安を抱きながら、明快な救済を求める若い世代の

共感を得たことだ。

「腐った」世界の破滅と、理想の世界の創造。そんなモチーフが当時、日本のサブカルチャーにあふれていた。今の状況はさらに深刻だ。社会の不公平感は強まり、未来に希望を持っていない若者は増えている。オウムのなものを生む風潮は広がり、何かをきっかけに暴発しない保障はない。

十年を経て、日本では関心が冷めているが、海外の関心は現在も高い。「9・11」の米同時テロ実行犯も高度な教育を受けていたため、米国はオウム事件との共通点を深部で探ろうとしている。単なる「狂信者」の仕業で終わらせず、破壊願望と実行へのプロセスに宗教がどうかかわったかを検証する作業は、残念ながら日本では抜け落ちていく。

科学万能主義に背を向けたり、社会から見れば特異な価値観を宗教や生活の規範に置く人たちはどの社会にも存在する。この十年で、そういった集団には「監視と処罰」で対応する傾向が強まった。しかし、反社会的な行動を取らない限り、排除するだけでなく、受け入れる社会の寛容も求められる。